



近盛晴嘉会長

## ジョセフ彦研究六〇年

### 司会

それでは続きまして近盛先生にお話を伺わせていただきます。

### ○近盛晴嘉ジョセフ彦記念会会長

内川芳美先生から非常におほめいただきまして、皆さんから拍手をいただくなど、思いもよらぬご好意で、ありがとうございます。また、きょうはこんなにたくさんお見えいただくとは、実は思っておりませんでした。これも感激でございます。

先ほど内川先生が「ジョセフ彦研究六〇年」という演題について説明を下さいましたが、内川先生にお目にかかったのは、いま内川先生の頭髮が私に近いようになっておられますが、まだふさふさとしていた昭和二九年、小野秀雄先生のお使いで、当時、読売の論説委員をしておりました大阪へおいでになりました。今度、日本新聞学会を同志社で開く、そのときに何か研究発表をしないか、同時に新聞学会に入会せよとのことでした。日本新聞学会ができたのはそれよりも三、四年前だったと思います。私はそのときに「海外新聞発刊九〇年」という題で同志社で初めて学会というものに臨んでお話をした記憶がございます。それが『新聞学評論』という新聞学会の機関誌の第四号に載っています。ですからそう古くないんですが、当時内川先生は小野先生の東京大学教授としての最後の教え子で、助手をさ

れておりました。

その後、去る八月に九四歳で亡くなられました城戸又一先生は毎日新聞のバリの特派員や学芸部長などをされた方で、私らの大先輩でしたが、その方が三代目の所長になられたときに、私は東京大学新聞学研究へ初めて足を踏み入れて、内川先生の研究室に入って行きました。そして城戸所長と真向かいに机をおいた二人だけの部屋でした。そして城戸さんからできるだけの応援はしてやるといようなお話をいただいたことがございます。

それが昭和二九年、ことしは昭和でいえば七二年ですから、もう四〇何年前で、内川先生が助手から助教授になり、教授になり、研究所長になり、そして定年になられて、成蹊大学の文学部長をされて、いまは東京大学の名誉教授です。ですから内川先生とは四〇何年間、私は非常にお教えをいただいております。

私が初めて出版しました『ジョセフ・ヒコ』という吉川弘文館の人物叢書がありますが、それを書くときに、戦後の青山の彦の墓がどうなっているかということを入川先生に尋ねたわけです。そうすると、奥さんと二人で青山へ行って、訪れる人もないようになっていて彦の墓に花を手向けたとおっしゃってくださいました。そのとき非常に感激しました。そのときから今日まで何かというところ相談をいたしております。そして昭和三年につくりましたジョセフ彦記念会の役員にも、一番初めか

ら理事になっていただいて、今日に至って、きょうの講演も先生にお願いしたわけです。

「ジョセフ彦研究六〇年」ということになりましたが、私がジョセフ彦について一番初めに書きましたのは、昭和一年八月二日から、「ジョセフ彦生誕一〇〇年祭を迎えて」という題で、当時勤めておりました大阪毎日新聞（現毎日新聞）の神戸版の第二面に書きました。京都版と神戸版は学芸欄的なものを第二面のトップに使っておりました。それに八日間連載しました。ですから生誕一〇〇年から没後一〇〇年、ちょうど六〇年になるわけです。

これは私が彦について執筆し、そして発表したものですが、その前にジョセフ彦についてボツになった原稿があるわけです。それはいまお手持ちいただいたと思いますが、「浄世夫彦」誌第四二号の九ページに朝日新聞の記事が二つあって、その一つは、私の人物叢書の出たときに朝日新聞がこれを読書欄のトップで紹介してくれて、その次に当時連載しておりました「著者と一時間」という箱物に載せてくれました。

そこに書いてありますが、一番初めにジョセフ彦の『海外新聞』について、神戸市が昭和一〇年に「本邦民間新聞創始者ジョセフヒコ氏居址」という記念碑を建てました。その記念の講演会は神戸史談会の主催で昭和七年にありまして、私も聞きに行きました。

神戸には戦前山手線という市電がありまして、その下山手六

丁目の停留所前にYMCA会館があり、そこで講演会がありました。そのときに、朝日新聞の「天声人語」を執筆して、最後に俳句を毎日一つずつ載せているので有名だった永井瓢斎という人の書いた「天声人語」の切り抜きがここに張ってあります。これは私ではなしに、重久篤太郎といって幕末、明治の初めに来日した外人のことを非常に研究された方ですが、その先生が「ジョセフ・ヒコの生涯」といってYMCAで講演会をした神戸史談会の川嶋禾舟という方の出したパンフレットにこの朝日新聞に載った永井瓢斎さんの「天声人語」を切り抜いてはっておられます。そこに

「神戸史談会の催で神戸市中山手通のジョセフ・ヒコ事、浜田彦造邸址に「本邦新聞創始者ジョセフ・ヒコ居宅址」碑を建立し▼十一日……」、ということは、一九三二年と、もう昭和七年十二月の当時から重久先生は西暦の年号を書かれておりますが、そこで講演会があった。「午後一時から下山手青年会館で三十五年忌を厳修し、五十崎夏次郎氏らの講演があるはず」とありますが、ご自分もその講演会に出て来られました。靴を持って、その靴の中に本を三冊ほど入れられたのをお見せになつて講演されたことをはっきり記憶しております。

その「天声人語」で、

「彦造の『海外新聞』が元治元年に発行されたのは、外国の

ニュース、輸出入品の相場を記して民間の渴望を医せんがため、正しくいへば「本邦民間新聞の創始者」というのが当つている。▼いや、左ういはねば後年に至つて、史実を誤り、研究者を惑はす、碑面の文字は訂正ありたい」

というようなことを書いて、「本邦新聞創始者ジョセフ・ヒコ」が住んでいた跡に、居宅址という碑を建ててのを、「民間新聞創始者」というふうに改めよということを提言されたわけです。

その折に私もまだ若かったです聞いておりました。しかしそれはおかしい、「本邦新聞創始者のほうが正しいんだ」ということを書いて毎日新聞の神戸支局に投書したんです。ところが載らないので、支局を訪ねました。その支局の次長で越智祐男という愛媛県人で、これはのちに私が毎日新聞に入ってから知ったんですが、支局長は当時の内国通信部長をしていた上田正二郎という人でした。そして私に「内容が非常によく神戸版では惜しいから、学芸欄に載せるように大阪の本社へ送った」という返事だった。しかし、待てど暮らせど載らなかつたんです。

朝日新聞が私の人物叢書の「ジョセフ・ヒコ」の新刊紹介を載せてくれるためにインタビューに來られた折に、その話をしたんです。その折にインタビューに來た記者が私に「あなた、そんなことを言ってもいいんですか」と言っていました。そ



れをちゃんと「著者と一時間」というインタビューに載せておきます。

「そう、昭和七年でした。神戸市が山手に「本邦民間新聞創始者ジョセフ・ヒコ氏居址」という碑を建てたんです。私は、民間という言葉に反発を感じた。新聞に官製も民間もあるものか。なるほど文久二年「官板バタビヤ新聞」というのが幕府の手で発行されてはいる。だが、これはオランダの新聞記事を機械的に翻訳したもので、日本人が作った新聞じゃないんです。私は、ものを知らないにも程があると腹が立って、毎日新聞に投書した。ボツになりましたがね」

というふうに朝日新聞は書いてくれた。

今度この「浄世夫彦」誌四二号にも「日本新聞協会（会長小池唯夫・毎日新聞社長）にお問ねいたします」というのを六ページ、正味記事は三ページですが、写真やいろいろ関連した寫眞を載せて、これを問ねています。いまのインドネシアが、かつてオランダ領時代の首都であったジャカルタの旧称バタビヤで発行されていた官報『ヤファス・クーラント』をオランダ政庁から献上された徳川幕府が抄訳して『官板バタビヤ新聞』として発行した。「バタビヤ」というのは間違っているんです。ここにもバタビヤ新聞の現物の寫眞を載せていますけれど、このバタビヤ新聞というものは日本の新聞ではないんだ、バタビ

ヤの新聞を幕府が翻訳をして出したのであって、日本の新聞ではない。シェークスピアの劇を訳しても日本の劇ではないんだ、トルストイの小説を訳しても日本の小説ではないんだというふうな話をしたわけです。

ところが、神戸市が建てたこの碑に英語では、その上に「PIONEER OF JAPANESE NEWSPAPER」、日本の新聞のバイオニアだと書いてある。ところが日本語では「民間新聞創始者」と書いている。この辺に間違いのものができたわけです。

しかし日本の新聞といえば、日本の文字で、日本人に読まずために、日本でつくったものでなければならぬ。なるほど彦は米英の新聞、雑誌から日本人が関心を持つであろう、または興味を感じるであろうというようなものをピックアップして翻訳して、一つのジョセフ彦の『海外新聞』というものをつくったわけです。

ですからこれは単なる翻訳ではない。彦の『海外新聞』だという独創的なものをつくっている。しかも日本で編集し、日本で印刷し、そして販売し、まあお金を出して買った人は少ないけれども、いずれにしろ定価をつけてこれを販売している。そしてこれを定期刊行して月に何回か出している。日本に外国の定期船が来たときに出すというふうに断っています。

徳川時代に読売瓦版というのがあってニュースを伝えた。しかしこれは事件があったときに発行したので、定期性がない。だからこれは新聞ではなしに、読売瓦版とわれわれは名づけて

おります。ですから新聞という以上は、どうしても定期に発行することが必要である。

ところが『官板バタヒヤ新聞』は、一月、二月に発行し、飛んで八月、九月。バタヒヤから持つて来てくれて、これを幕府に献上したときに翻訳して発行、定期ではないんです。オランダのバタヒヤ政庁が出したものを日本の徳川幕府に献上したときに、これを翻訳したので、定期性はない。

いまは「その新聞を取ってくれ」と言ったら、新聞紙を渡してくれます。しかし当時の人は新聞と新聞紙は、はっきり区別して、新聞はニュースという意味で使っていました。「本日から面白い新聞を手に入れました」というような記事の書き出しを書いていることを、われわれはしばしば体験します。

福沢諭吉先生が英国へ留学する福澤英之助あてに出した慶應三年十二月十六日付けの手紙に、「イタリーの新聞を送ってくれて非常にありがたかった。新聞はこれからも送ってほしい」と書いている。「新聞は」「新聞を」という、これはニュースという意味で、新聞紙と新聞とははっきり区別していたんです。その当時の『官板バタヒヤ新聞』の「新聞」という文字を、今日の新聞紙と同じように取るのは、ちよつとものを知らぬにもほどがあるというふうに思つて、毎日新聞の社長が会長である日本新聞協会に質問いたしました。

毎日新聞社は『二十一大先覚記者伝』という本を出していますが、本山彦一社長がその序文を書いたところによれば、春秋

の彼岸会に二十人の先覚記者の英霊を祭り、その業績を顕彰するとともに遺徳を感謝してきたが、彦が本当に日本の新聞の元祖であることがわかった、だから一人増やして二十一代先覚記者としたんだ、これは土屋元作の書いたものによつてしたと、こういうふうに書いているんです。この土屋元作先生の書かれたのが、『新聞の元祖』で、神戸新聞が創刊五十周年記念に出版したのが、この『新聞の父、アメリカ彦蔵物語』です。

ですからジョセフ彦を「新聞の父」とか「元祖」というふうにいふんですが、新聞協会はこの彦の『海外新聞』を抜きにして、横浜は日刊新聞である『横浜毎日新聞』が発行されたところだ、だからそこに新聞博物館をつくるんだというふうに書いているわけです。しかし横浜は日本最初の日刊新聞の前に、日本最初の新聞であるジョセフ彦の『海外新聞』を発刊したところなんです。

三年前の平成六年に私もジョセフ彦記念会はここに「日本における新聞誕生の地」だという記念碑を建てました。その下に地元中華街の人の要求で漢文で書いてくれといわれるので「日本国新聞発祥之地」、そして上に英語でこで彦が日本最初の新聞『海外新聞』を発刊したことを記しました。

これは、きょうもおいでくださっている金井圓先生が英語も入れるようにとおっしゃってくださって、なるほどそうだと思つて、アメリカではどういうふうしていますかと、アメリカでジョセフ彦記念会の支部をつくってくださいだした黒田良信師に

尋ねて、その教えに従った英文を彫ってあります。

『海外新聞』という題字は海の外からのニュースだというふうな注を入れた。ところが原文にそういうふうに書いてあるならば（バーレン）でいいけれども、そうではなしに、碑をつくった折の説明ならば、『ブラケット』にしなければならぬというように黒田さんから教えを受けまして、それを守ってつくっています。

あの短い説明ですが、私どもは英文の習慣をあまり知らないものですから、ついバーレンでやっていたのをブラケットに直した。だからできるだけの心くばりをしてつくった。そういうふうにならばいいんですが。

横浜は日本のミナト横浜として幕末、明治の米欧の文化を受け入れる窓口であった。そこで日本最初の新聞がつくられた。日本最初の日刊新聞である『横浜毎日新聞』が発刊されたのは明治三年で、東京で日刊新聞の『東京日日新聞』『日新眞事誌』『郵便報知新聞』が発刊されたのは明治五年です。だから横浜は日本最初の新聞であるジョセフ彦の『海外新聞』が創刊されたところであり、同時に、日本最初の日刊新聞の発祥の地でもある。この日本の新聞文化における横浜というものの値打ちをちゃんと認識しなければいけない。

ですから朝日新聞が書いてくれた『著者と一時間』という記事の最後のところで、私はこういうふうに語っております。

「今年は『海外新聞』の発刊百年祭です。でも、私は、日本の新聞が始って百年という本当の意義を強調したい。そして、できれば、このわが国新聞発祥の地である横浜の現地に、ヒコの顕彰碑を新聞協会あたりの手で建てて欲しいと思います」

そういうふうに昭和三十九年一月二〇日付の朝日新聞が、私の新聞紹介をして下さったときの記事で語っています。ところが新聞協会は一つもやってくれない。そして私どもの彦記念会が三年前の平成九年にこれを建てたら、その「わが国最初の新聞発祥の地」であるということ抜きにして、「日本新聞協会の発表によれば」と、「横浜は日刊新聞発祥の地であるから新聞博物館を建てるんだ」と新聞協会が発表したと、朝日新聞が報道しています。で、彦の『海外新聞』というものを黙殺する。なぜそんなに彦を無視しなければいけないのかというふうな義憤を感じて、この「日本新聞協会にお問ねいたします」というのを書いたんです。

このハガキがそれに対する日本新聞協会からの回答です。

「拝啓 貴殿におかれてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。ジョセフ彦記念会誌第四二号を拝読させていただきました。貴重なご意見を賜り誠にありがとうございます。新聞博物館の構想を練る際に参考とさせていただきます。寒さに向かう折からご自愛くださいますようお願い申し上げます。敬具



一九九七年十一月二十八日 日本新聞協会教育文化部

「参考にさせていただきます」なんです。役人というものは、「貴重なご意見を」とか、「参考にします」とか、「慎重に審議します」とか、何にもしないときにこういうような返事をするのが官僚のいき方だと新聞はよくそういうような解説を載せております。私も新聞記者上がりで、こういうようなものはやる気がない折にお体裁だけの返事だなあとという印象を受けました。皆さんがどうお考えになるかは皆さんにおまかせしますが、私は誠意をもってあれを読んだものではないなというふうに感じました。

ここに『本邦新聞史』という明治時代に出した日本の新聞史の非常にまとまったものがあります。その後編として『本邦新聞紙の起原とその変遷』という項目をつけまして、

「本邦新聞紙の起原は、江戸時代に発達したる、読売瓦版の進化せしものに非ずして、外国新聞紙の翻訳に発したるものなり」というふうな書き出しをしております。

そして、「文久二年正月に至り、瓜哇のバタヒヤに於て発行せる蘭字新聞を訳せし官板バタヒヤ新聞にして、本所堅川三之八、老皇館萬屋平四郎に命じて発売せしめたり。これ実に本邦新聞紙の先驅をなせしものなりと共に、本活字版を新聞紙に使用せし、濫觴なりといふべし、同年八月に至り米國紐育に於て発行せる新聞紙中、合衆國戦争記事を翻訳せし、『官板海外新

聞別集も亦本活字版にて発兌せられしが、次で支那の香港及び寧波に於て発刊せる新聞紙……」に訓点を施し……。かくて元治元年四月に至り横浜百四十二番館より『新聞紙』発兌せらる。これ実に本邦新聞紙の権輿なりといふべし。而して其創業の状況は、岸田吟香氏の『新聞実歴談』に書いている。」

というように、ちゃんとはつきりと『バタヒヤ新聞』は「新聞紙の先驅をなせしものであつて彦の『海外新聞』が日本の新聞の歴史の一番初めのものとして尊重されているゆえんを、この『本邦新聞史』は書いている。明治の時代から私のいうところのことを書いているんです。それなのに平成九年になつて、『二〇〇〇年に新聞博物館をつくる折に参考にさせていただきます』と、のんきなことをいつている。

日本の新聞記者ならばそんなことはいわない。しかし日本新聞協会の職員は新聞人ではないんですね。やっぱり官僚化されている協会の職員だというふうに私は受け取りました。

私がこの『浄世夫彦』誌四二号に「日本新聞協会にお問ねいたします」という文章をつくつて、この一〇〇年記念の折の会誌の二〇ページのうちの六ページを使つたつもりです。

二〇ページで一部お送りするのに九〇円の郵送料がぎりぎりです。これをちよつとでも超えると一部一九〇円の郵送料が必要です。一部を送るのに一〇〇円違ふと、やっぱり発行者としては考えざるを得ない。ですから印刷所に、二〇ページで、そこに

振込み用紙をつけるから、九〇円でいけるように紙を考えてくれと頼みました。写真がよく写るようにいい紙を使いたいけれども、もつと硬くすると、どうしても一九〇円になるからと、紙の質まで考えて幾らの重さになるかと、そういうふうな計算までして出しているこの二〇ページなんです。その六ページを使いました。

この前の四一号は、アメリカで彦記念会の支部をつくってくださった黒田さんが亡くなられた。そのために黒田良信<sup>アドル</sup>さんには日本文二ページに六ページの英文欄をつくりました。ジョセフ彦記念会は、ハワイとワシントンに支部がございます。そういうふうにはアメリカでもこのジョセフ彦記念会というものを認識してくれている。ありがたいことだと思います。

私はアメリカへ昭和五二年と五三年に行きました。昭和五二年七月四日にワシントンへ直行で行きました。一九七六年がアメリカの独立二〇〇年、ですから七七年で二〇一年目の七月四日の独立記念日に行きました。初めはワシントンへ直行して引き返してきましたが、その次の年はハワイからサンフランシスコへ行き、そしてボストン、ニューヨーク、ワシントンへ行つて、七月四日に同じ太平洋を飛行機で行ったり来たりせずに、海の向こうへ行こうと思ひまして、ロンドンへ飛び、パリ、ローマ、アムステルダムなどヨーロッパも歩いて帰りました。その第一回に行ったときは、七月四日の朝六時に着きました。こちらを出発した日の前の日に着くわけです。私が大阪の豊中

の服部というところにいた時間よりもまだバックした時間に着いたわけです。

そのときに米国の議会図書館の小林ケイさんが、独立記念日で、前日が日曜日で連休で、わざわざ迎えに来て下さって、一週間いろいろ案内してくださいました。

ワシントンへ行かれた方は小林さんにお世話になった方も多いとおられると思います。その小林さんが私にくださったのがこのネクタイです。これは先ほどあるご婦人からほめられましたが、ここに一九七六年と一九七六年と、建国二〇〇年を経た年数を書いて、その年号の列と列の間にアメリカの国旗を入れていきます。そして星は一三あります。「これは独立二〇〇年記念にアメリカ政府がみんなに配つたものだ。だからあなたに記念に上げる」といつてもらったんです。そのまま箱に入れてあって、まだ一度も使つたことがなかった。きょうのために私は何かゆかりのものをと思つて考えて、「そうだ、あのネクタイをしていこう」と、豊中からこれを持って来て、けさ初めてこれを使いました。

それできょうここで講演をした後、これをまた大事にしまつておこうと、彦一〇〇年祭に皆さんに紹介して、そして記念に置いておきたいと思つたわけです。先ほど大隈庭園でほめてくれた伊藤女史には、「後で話をするから」といつて答えたんですが、そういうような次第です。

日本ではもう大体において調べるだけのものは調べた。だから



らアメリカへ行つて、まだ日本ではわからなかったことを調べて、彦についていままで研究したものを、まあ二、三の本にしましたけれども、集大成しようと思つて、初めは三週間行きましました。帰つて来たら、どうももうちよつと足らない、もうひとつ自信が持てないと思つて、翌年、老妻と二人で五日かけて、航空機を一九回乗りついで四万マイルの地球をグルッと回つてきました。彦が太平洋を漂流した五二日で世界を回つてきました。

私は昭和四〇年五月一六日の誕生日に読売新聞を五五歳で定年退社しました。その九月から大阪の帝塚山学院短期大学の教壇に立ち、一三年間勤めて、昭和五三年、六八歳で第二の定年になりました。その定年前の五二年に一ぺん行きまして、また定年になってからすぐ第二回目に行つたわけです。

そういうふうにして私はジョセフ彦研究というのは本当は昭和七年に毎日新聞に投書してボツになったときから勘定すべきですが、そうではなしに、やはり昭和一一年に毎日新聞に八日間連載した「ジョセフ彦生誕一〇〇年」、それから「没後一〇〇年」、ちょうど六〇年になるから区切りがいいと思つて、きょうの演題にしたわけです。

そこに展示しましたものは、大体においていままで発表したもののうちで、これと思うものを展示しました。スペースがあまりないものですから、たとえば彦を助けて『海外新聞』を発行した岸田吟香、本間清雄、それから彦の『海外新聞』をお金

を出して買った肥後藩の莊村省三と岩男助之丞、それから柳川の中村祐興などの関係の資料を展示できませんでしたのが残念です。また、『肥後藩国史史料』という膨大な本が十冊出ていますが、それに、彦の『海外新聞』の購読を命じたとか、また莊村省三が長崎から熊本の本細川藩に報告して、きょう坂本竜馬と彦と私と三人で開国日本の議會制を鼎談した。その折に彦が国会を三つつくるといふ案を語り、ちゃんと幕府にもいつたと話したことなどを語つた史実がこの『肥後藩国史史料』に載っているわけです。

ですから坂本竜馬の「船中八策」で議會制をこうせよといふことを書いているそのもとは、彦から学んだんだ。中浜万次郎からだれそれが聞いて、それをまた坂本竜馬が聞いたんだといふような、まわりくどい推測をされていますが、それは間違いだといふことを、はつきり書いて発表しました。

あそこに創刊号から四二号までの『浄世夫彦』の会誌、これは一行の広告も載せずに、そして皆さんから寄せていただいたご好意の基金をもとにしてつくり、横浜に建てた碑そのものが六〇〇万円ほどかかり、またつくるについて二〇〇万円ほどの金が必要でしたが、それらも全部皆さんのご好意でできたわけです。私がつくつたのではないんです。彦のことを熱心にやっている近盛を助けてやろうといふお心持ちがありがたいわけです。

正直な話、私はいま満八七歳です。数えていえば米寿、八八

歳です。もう二年経てば九〇才の卒寿になります。神戸に徳川二代將軍秀忠のときからある春日野墓地というのがございまして、その墓地も私が世話をしていて、これがもう三〇年ほどになります。昭和四〇頃に五千坪のところを新幹線の新神戸駅の駅員の宿舎をつくるためにこの墓地を移ってくれといわれて、とやかくしている間に新幹線が通ってしまつて、神戸市がその移転問題を取り下げてくれた。

戦中・戦後、大きな木が生い茂つていて、その後どういふうにしてやるかということで、当時、終戦直後でも見積りが木を伐採するのに一千万円でした。そのときに三七〇年続いた春日野墓地の会計に残っていた金が二十九万円しかない。その二十九万円で当時の一千万円の見積りを出された墓地をちゃんとするにはどうしたらいいかと、これは大変なことで苦労しましたが、ようやく今日やや公園墓地らしいものをつくれた。

青山墓地のあの彦の墓はいま私がお守りしています。神戸の三七〇年の歴史のある春日野墓地をやはり私がいま協会の会長で、理事長で、墓地の管理者と、一人三役を押しつけられて御奉仕していますが、どうも墓守人生もあんまりありがたいものではないなというふうに感じていますけれども、そのおかげで何とか今日元気に皆さんとお話できるぐらいになっていることは、まだし足りないようなところがあるにしても、まあまあそういう余得だなというふうに感じております。

きょうこういう会を持って、そして皆さん、これだけたくさ

んの方々がおいでくださいました。朝一〇時に青山墓地で墓前祭をやりました。そのときに来ていただいで、大学の講義でお帰りになつて、そしてまたこの講演会に来てくださるなど、熱心に御協力いただきました。また正直な話、存じ上げている方も多いですが、初めてここでお目にかかる方も多く、ありがたいなと思つております。

そういうわけで、今後も続けたいと思いますが、どうぞよろしくご援助、ご指導をお願いいたします。ご静聴ありがとうございます。ございました。(拍手)

#### 司会

きょうは遠方からおいでくださった方もいらつしやるようで、大変ありがとうございます。それではこれをもちましてこの講演会を終了させていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)